

# 顔面痙攣の患者の看護をとおして学んだこと

歯科口腔外科 発表者 日比野 和 子

小 林 けさい

## I はじめに

近年口腔領域の神経疾患を主訴として来院する患者が増加の傾向にある。当科外来では顔面痙攣の治療に理学療法（ハリ治療）、薬物療法、局所注射（以後局注と略す）、顔面神経ブロック療法（以後ブロックと略す）等行っている。長期に渡り通院治療中にある患者をとおしてどのようにこれらの治療が受け入れられているかを学んだので発表する。

## II 症例紹介

### 症例 1

氏 名：○山○子 48才 女性

病 名：左顔面痙攣

既往症：なし

職 業：主婦

来院までの経過：10年前より左眼瞼周囲の筋肉の痙攣がおこってきたが最初は軽度で回数も少なく、疼痛なく放置していた。昭和58年3月頃より頻回におこるようになった。某院脳外科を受診し、内服薬を投与されたが効果なく、昭和58年4月5日当科受診する。

来院後の治療経過：表1参照

月日	5/IV	19/IV	25/IV	10/V	24/V	7/VI	21/VI	8/VII	19/VII
治療									
ハリ	→								
内服薬	メチコバル 500 $\mu$ g → フェルデン 6cap セルシン 6mg →セルシン 9mg →								
局注 ブロック	局注 メチコバル 500 $\mu$ g 2%キシロカイン → ブロック 2回 → 2%キシロカイン メチコバル 500 $\mu$ g								
症状	改善傾向			以前より 悪化傾向			改善 ほぼ 傾向 改善		

(表1)

### 症例 2

氏 名：○田○子 55才 女性

病 名：右顔面痙攣

既往症：昭和27年肺結核 昭和43年子宮筋腫 胆石手術 昭和56年関節リウマチ

職 業：主婦

来院までの経過：昭和56年突然右眼瞼にチック様痙攣発作あり，某病院で電気治療，ハリ治療，内服治療を受けるも効果なく，昭和57年2月26日当科を訪れる。来院時右眼瞼にチック様痙攣みられる。(右頸部の筋肉痛が発生すると痙攣が激しくなる。無意識に痙攣があり，チック症状となる)。右頸部のひきつれ，筋肉痛，冷熱感がある。

来院後の治療および経過：表Ⅱ参照

月日	昭和57年 26/ Ⅱ	29/ Ⅶ	14/ Ⅺ	27/ Ⅻ
治療				
ハ リ	電気通電(1週間毎)表面電極			
内 服	A TP 180mg メチコバール1500μg ユベラ N 600mg	→ 29/ Ⅶ	14/ Ⅺ 内服中止	←ムスカルムD 300mg
症 状	著変なし			

月日	昭和58年 1/ Ⅰ	22/ Ⅲ	19/ Ⅳ	27/ Ⅵ	7/ Ⅶ	11/ Ⅶ	26/ Ⅶ
治療							
ハ リ	続 行						
内 服	25/ Ⅰ メチコバール1500μg ムスカルムD 300mg	22/ Ⅲ	19/ Ⅳ セルシン 6 mg	27/ Ⅵ			
局 注 ブロック				局 注 12回 ←メチコバール500μg→ 2010 キシロカイン	ブロック 3回 ←メチコバール500μg→ 2010 キシロカイン		
症 状	著変なし			→時々改善あり		19/ Ⅶ 耳下部鈍痛	改善著明

(表Ⅱ)

### Ⅲ 看護の実際

#### 1. 看護目標

無理なく治療を受け入れさせる。不安の緩和に努める。通院する意欲をもたせる。

#### 2. 問題点

##### 1) 痙攣による精神的苦痛

- 顔貌の変化を人にみられるのがいやで家の中に閉じ込もってしまう。
- 対人関係における精神的緊張による症状の悪化。
- 疾病に対する不安、治らないのではないかという不安がつきまとい、いらいらする。

## 2) 治療に対する不安

## 3) 長期通院に対する時間的問題

## 3. 対策

治療に対する不安、予後に対する不安を十分理解し適切な配慮を行う。

- 来院するたびに患者とコミュニケーションをもち気持の受容につとめる。
- 患者の疾患に対する受け止めかたを知る。
- 治療の前に十分なオリエンテーションを行う。

### ハリ治療に対するオリエンテーション

ハリ治療は、とくに顔面、頭部に有効なことは証明されている。副作用がほとんどなく安全なものである。細いハリを痛めずに簡単に無痛にハリを皮膚に通すことができる。刺針の深さは普通顔面においては10～15mmで反応の如何によって変える。治療中は安静仰臥位を保ち、急に体位を変えたり、会話、咳など筋肉の突然の収縮を起こさないように注意する。一般的注意として、入浴前後の時間、運動直後（15分位は休ませてから刺針）、月経時、妊娠時にはハリ治療はさける。又体調が悪い時、高度に緊張しているときは治療をさける。刺針による疼痛、治療中の急激な感覚の変化、発熱、発疹、出血、脳貧血、ショック症状に注意する。

### ハリのひびきについて

ハリを刺したとき特有の感覚を針感または得気とよんでいる。感じ方はさまざまで、たとえばズシンとした感じとか棒で押すような感じとか、あるいはスーッとする清涼感など覚える。とくに病変のあるところなど快よく感じるという。ハリのひびきは普通ハリの刺入部位周囲に感じる人が多いが、時には、その部位よりはるかに離れた場所に感じることもある。

### ブロックに対するオリエンテーション

痙攣を静めるために顔面神経線維に注射をして、その運動を遮断する。耳後部に注射する。普通の注射針を刺すのと変りないが、手技を要する治療である。体位は仰臥位で肩の力をぬき楽な姿勢をとる。針が刺入すると疼痛があるが、頭や首を急激に動かさないよう介助しながら一般状態を観察する。一瞬で終了するが、もし眼球振盪を伴ったためまい、味覚障害、外耳道への出血などがあつたら早く知らせるよう指導する。

## IV 結果

私共は来院時短時間ではあるが意識的に患者とコミュニケーションをもち疾病、治療に対する不安を受容できた。症例1は痙攣の治療には長期間の通院の必要性を話し、日常生活に積極的に取りくむよう勧めて治療を開始した。ハリ治療の経験はなかったが、ハリ治療の有効性、副作用のほと

んどない安全なもの等説明し、無理なく治療が受け入れられた。局注およびブロックも協力的であった。疾病に対する不安も症状が改善傾向にあった3回目の来院時にはハリの効果があった。もうすこし続ければ改善できると分かるさを見だが、5回目の来院時は悪化状態にあり、見透しが欲しい、少しでも痙攣間隔が減って欲しいと焦りがみられた。長期通院に励んでいる患者の例や疾病の一進一退の変化等はげました。発病より経過が短かかったためと、性格も外向的であり治療に対し積極的であった。ブロック2回施行後寛解状態となり、症状の悪化の場合は来院するよう指導し、当科における治療を昭和58年7月19日をもって終了した。

症例2は約1年間某病院での治療をうけており、ハリ治療の経験もあり、ハリ治療の導入はスムーズであった。ハリ治療と内服治療を当科において1週間毎に14ヶ月続けられた。その間症状の悪化こそなかったが、一時的改善傾向の変化のみではっきりと改善したと自覚するまでにはいたらなかった。患者は時々通院がいやになった。このままの状態がいつまで続くのかと訴える。そのつど訴えを受け入れ励ますようつとめた。又通院時待時間のないよう配慮した。家が近くで通院しやすかった事と、患者の強い意志と家族や友達の励ましに支えられて、根気よい治療が続けられた。患者は経過の長いことを十分理解している。本年4月ハリ治療に耳前部への局注が試みられ6月末までに12回施行された。1回の局注が1~3日の改善効果はあったが長くは続かなかった。しかし患者にとっては一時的ではあったが改善を知ることにより期待を持つことになり、ブロックに対しても協力的であった。7月中にブロックが3回施行され痙攣はなくなった。ブロックによる薬害の不安の訴えがあったが使用薬品には使用量も少量で習慣性のないこと等説明し納得した。7月末を持ち著明に改善があったので一時通院を中断している。

## V 考察

症例1.2ともハリ治療、内服治療が続けられ、最終的にはブロックで改善された。顔面痙攣の治療は今やブロックの施行により改善効果が上げられている。私共はその効果、経過がまだどのようなものであるのかははっきりとは解らなかったがハリのひびきの様子、持続時間など患者を通して学ぶことができた。1~2週間ごとに治療にくる患者に対し、来院時の外見上の変化、症状の観察に終わってしまいがちであるが、次回来院までに患者が受けとめたものを把握することが看護にとって、今後の援助に役立つ。意識的に患者と接する時間をとり働きかけをし、通院意欲を積極的なものにしたと思う。又症例2より患者は自分の経験から体得した尺度で自分の状態をみつめている事を知った。

## VI おわりに

この症例をとおして患者が疾病や治療に対して受けとめているものの大きさや深さを知る事ができた。患者の受けとめているものを把握するには、コミュニケーションと観察の大切さを学んだ。顔面神経ブロックより一時的改善を見だが、今後どの様な経過をとるのか見守ってゆきたい。

この研究にあたり御協力下さった皆様に感謝します。

### 参考文献

- 1) 鈴木貢, 小谷朗編: 口腔科学 日本医事新報社

- 2) 松平邦夫, 福岡明, 高橋一祐: 臨床歯科ハリ麻酔入門 KK書林
- 3) 川島みどり, 藤田五郎編集: 外来看護 医学書院
- 4) 山本亨, 若杉文吉著: 図解痛みの治療 医学書院